

第1部 エッセイ

テーマ「おむすび」

小中学生の部

佳作

おむすびのかたち

宮崎 純大

目が覚めて、すぐに気づいた。寝過ごしてしまったのだ。目覚まし時計は昨日の夜、確実にセットしておいたはずだったのに。ベッドから飛び起きる。着替える。洗面所で顔を洗い、歯を磨く。その間、約三分。

「おはよう。何回も起こしたんやで」

母の声と、テーブルには、おむすびが二つ。

「それ食べてすぐ出たらまだ間に合うから」

うすく玉子で巻かれたおむすびを一つ口に放り込み、靴下を履く。そして通学用のリュックを背負って母に言う。

「いってきます」

「いってらっしゃい。気をつけてね」

走らず、歩いても間に合いそうな時間に何とか家を出ることができた。ほっとした気分になって、空を見た。やわらかい青色のなかで、白い雲と太陽の光が重なる。

ついこの前まではセミが鳴いて、すこし動いただけで汗が流れ落ちた。でも今日の風は涼しくて、さわやかで、軽やかな感じ。

学校がおわって家に帰ったら、一つ残ってあるおむすびを食べようと思った。でも妹がもう食べているかも知れない。

僕も妹も、母のおむすびが好きだ。コンビニのおむすびも美味しいけれど、その美味しさとはまたちよつと違う。やさしくて、やわらかい味わい。今日の空のようだと思った。

テスト前にあわてて夜中に勉強をしているときも、母はおむすびを二つ、作ってくれる。それを食べてもうひとがんばり、と思える味。

母のおむすびは、不思議な力があると思った。僕と妹を笑顔にするおむすび。母のおむすびひとつで、僕と妹はたくさんの力をもつことができて

いる。

もうすぐ学校に着く。同じクラス、同じ学年の人たちが前を歩いている。朝はパン、という人の方がいまは多いかも知れない。でも僕はパンではなくて、ごはん。母のおむすびで、今日という一日を始めたい。そのかたちと味は、やさしくて、元気をくれるから。